

古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群

川 崎 志 乃

1 はじめに

伊勢湾西岸部のほぼ中心部を流れる雲出川流域は、伊勢湾西岸地域においては前期古墳の数量・規模が突出する地域である。前方後方墳が集中して存在する点では日本列島においても希有な地域であるが、その内容は不鮮明である。しかし、集落遺跡である雲出島貫遺跡において各地域の土器が搬入されていることが確認され、当時の土器交流が活発であったことが知られるようになった（川崎 2001）。また、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての関東地方の出現期古墳に東海地方西部系土器が含まれていることが知られてきたが、伊勢平野の雲出川下流域に出自を求められる土器群が存在し、その背後には近畿地方からの影響がみられることが明らかになった（川崎 2006）。本稿では、近年、雲出川下流域における集落遺跡の資料数が増加してきたことから、古墳出現期の集落遺跡の動態を検討したい。

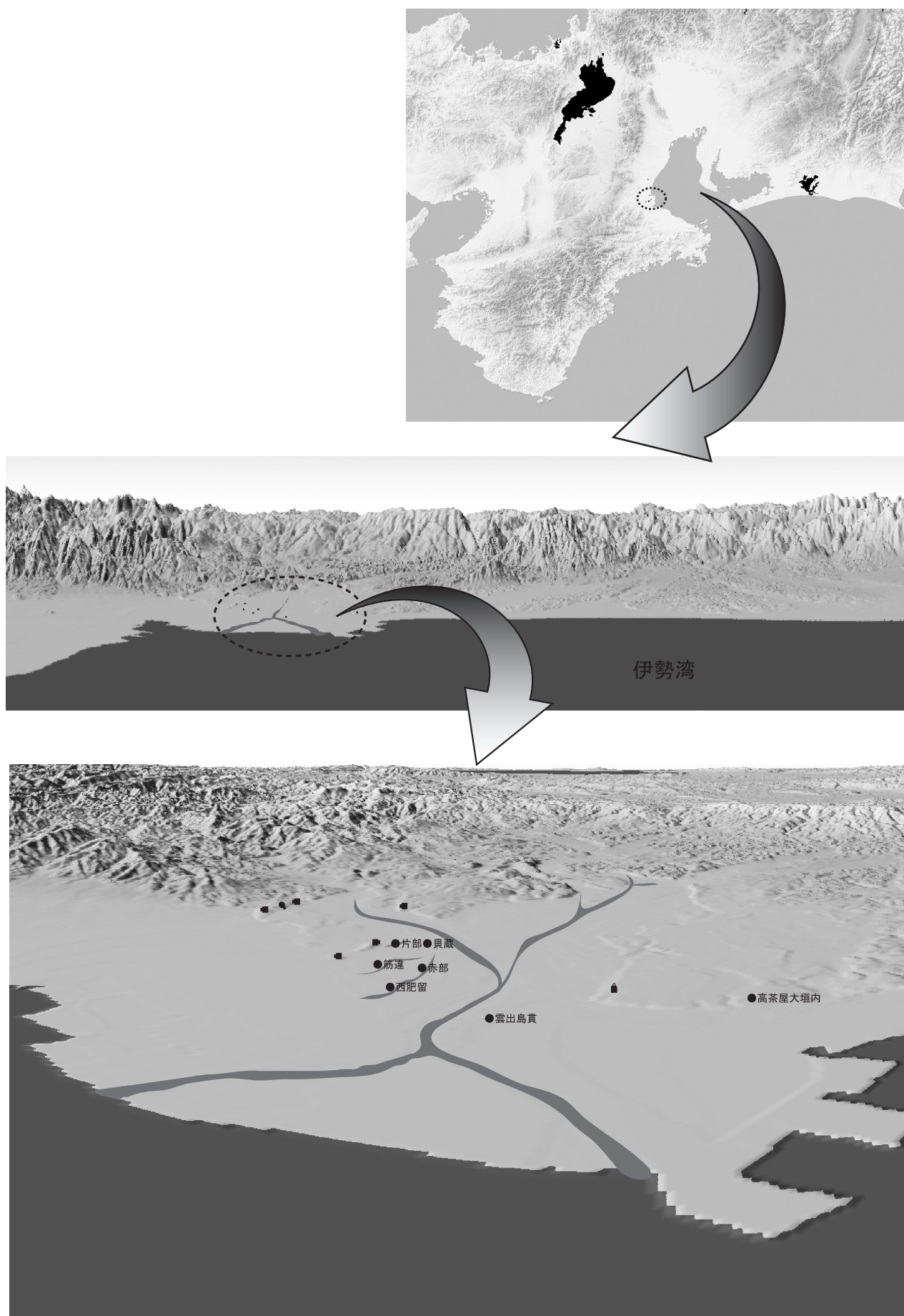
2 各遺跡の様相と画期

雲出川右岸の西肥留遺跡・赤部遺跡・片部・貝蔵遺跡は同じ旧河道の自然堤防上に立地する遺跡であり、筋違遺跡⁽¹⁾も一連の旧河道から分岐した旧河道の自然堤防上に位置する。西肥留遺跡で旧河道岸に護岸の土堤と柵が確認されていることや筋違遺跡で古墳時代前期の水田層であるⅣ層上部 a-3 層に伴う旧河道岸の土堤に袋状鉄斧が埋納されていた点から、旧河道を意識した人間活動が行われていることが分かる。つまり、当該時期に河道として機能しており、旧河道がこれらの遺跡間を往来する導線となっていた可能性が高い。

旧河道の自然堤防から後背低地までを横断する形で調査が行われた西肥留遺跡では、自然堤防を利用した微高地上に居住域を中心とする集落が展開する。微高地の規模は大きく、Ⅲ-1 期（山中Ⅱ式）の段階で約 130 × 170 m、Ⅲ-4 期（島貫Ⅲ期新相）段階で 130 × 310 m である。調査区は自然堤防の南東部に相当する地点と考えられ、その中でも金属加工の痕跡は南東部に集中する。集落構造の変化の点では、島貫Ⅲ期古相に居住域と生産域（金属加工）の間が溝で区画されていたのに対し、島貫Ⅲ期新相には居住域と墓域が溝で区画されるようになる。集落の様相や金属加工の痕跡は、土器の変化に連動した特徴的な変化は認められない。片部・貝蔵遺跡のうち貝蔵遺跡は西肥留遺跡・赤部遺跡と同じ旧河道の自然堤防上に位置しており、片部遺跡は後背低地に位置する。貝蔵遺跡では、縄文時代晩期後半から奈良時代の遺構が同一遺構面で検出されていることから同一旧河道の自然堤防上とはいえども安定した地点といえるが、網目状に水路が巡っていることから確保できる面積は極めて狭い。片部遺跡で確認された大溝は堰が多く確認されている点から船が往来することは困難と思われ、両岸に水田が展開する状況と合わせて第一義的には農業用の灌漑水路と捉えておく。筋違遺跡は居住域の展開する微高地の面積が狭い。居住域と水田域の間には灌漑水路が掘削されており、旧河道と灌漑水路間は水田域が広がっている。

雲出川左岸の雲出島貫遺跡では居住域と墓域が 2 カ所ずつ確認されており、墓域は階層が異なることが明らかになっている。また、集落と水田域を区画する溝は島貫Ⅱ期新相には埋没するが、その後も集落は継続する。

これらの集落は、時期的には山中Ⅱ式および島貫Ⅰ期の土器が出土することが多く、集落形成が当該時期に遡る傾向が窺われる。消長については、雲出島貫遺跡では古墳時代前期後半の島貫Ⅳ期以降前期末には一時収束する。同様の傾向が他の遺跡でもみられ、西肥留遺跡では木棺墓が旧河道際の自然堤防上に配置されるようになるのは中期以降と考えられる。筋違遺跡では、水田部のⅣ層上部 a-3 層は古墳時代前期を通じて耕作の営まれていた可能性があり、居住域と水田域を区画する溝が埋没し上部層であるⅣ層上部 a-2 層が水田域の耕作土層となるのは古墳時



第1図 古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群

(KASHMIR 3D を用いて作成)

	山中Ⅱ式	島貫Ⅰ期	島貫Ⅱ期古相	島貫Ⅱ期新相	島貫Ⅲ期古相	島貫Ⅲ期新相	島貫Ⅳ期	備考
高茶屋大垣内					○	○		
雲出島貫		△	△	○	○	○	○	
西肥留	○	△	△	○	○	○	○	
赤部				○	○	○	○	
片部・貝蔵								
筋違		○	○	○	○	○		

第1表 時期一覧表

	首長層の居住域・祭殿・倉庫		居住域		導線・区画	食料生産域	墓域	特殊遺物など
	方形区画	大型掘立柱建物	掘立柱建物	竪穴住居	旧河道・溝	水田	方形周溝墓	
高茶屋大垣内	○	○		○				庄内甕(生)
雲出島貫				○	○	○	○	磨石・朱付着土器
西肥留			○	○	○	○	○	銅鏃・鉄片・轡羽口・石杵
赤部			○	○	○	○		
片部・貝蔵	?	?		○	○堰	○		土製支脚
筋違				○	○	○		袋状鉄斧

第2表 遺構一覧表

	西部 瀬戸内	瀬戸内	近畿 河内		近江	北陸	伊勢湾岸 濃尾 三河		太平洋沿岸 西遠江 東遠江～駿河 南関東			北関東
高茶屋大垣内			庄内甕(生)	甕(布留)								
雲出島貫		甕		甕(タタキ・布留)・小形 埴・有段鉢・器台・高杯	甕	高杯・器 台	壺	壺	高杯	壺・甕	壺・甕	甕
西肥留				甕(タタキ・布留)・有段 鉢・器台・高杯		器台	壺		壺	壺		
赤部				甕(布留)		器台						
片部・貝蔵	支脚			甕(庄内・布留)		器台・甕						
筋違				甕(布留)		器台					壺	

第3表 外来系土器器種別一覧表

	西部 瀬戸内	瀬戸内	近畿 河内		近江	北陸	伊勢湾岸 濃尾 三河		太平洋沿岸 西遠江 東遠江～駿河 南関東			北関東
高茶屋大垣内			○	▲								
雲出島貫		▲		◎▲	○	○▲	○	○	▲	◎	○	○
西肥留		▲		○▲		▲	○		▲	○		
赤部				▲		▲						
片部・貝蔵	○			▲		△▲						
筋違				▲		▲					○	

第4表 外来系土器出土量一覧表

凡例： ◎搬入多数 ○搬入 △模倣多数 ▲模倣

代中期以降である。したがって、長期継続する遺跡が多いことが分かる。

そして象徴的な存在であるのが、高茶屋大垣内遺跡である。伊勢湾を見下ろす台地際に方形区画と竪穴住居群が並列して配置されている。方形区画の中には首長層の居住域・祭殿・あるいは倉庫と考えられる大型掘立柱建物が位置し、竪穴住居は円形に位置することから、計画的に配置されていることが分かる。時期的には島貫Ⅲ期古相から新相に限定される。

3 外来系土器の様相

外来系土器の出土量は、伊勢平野においては圧倒的に今回対象としている雲出川下流域の集落からの出土が多い。

弥生時代後期に広域的な土器交流が活発になることは、伊勢湾系土器が近畿地方に流入することや三河系土器が南関東地方に流通する点から知られてきた（小池 2004）が、山中Ⅱ式以降に近畿地方の土器が搬入されていることが西肥留遺跡 S E 260 から出土したタタキ甕・鉢の存在から明らかになり、古墳時代初頭の土器交流につながる初現を山中Ⅱ式に見いだすことができるようになった。

遺跡単位でみていくと、高茶屋大垣内遺跡からは伊勢平野では唯一、生駒西麓産の庄内形甕が出土しているが、近畿系以外の外来系土器は出土していない。そして、雲出島貫遺跡・西肥留遺跡・赤部遺跡・片部・貝蔵遺跡・筋違遺跡では、複数の地域からの外来系土器が出土している。雲出島貫遺跡では搬入品が多く出土しているが、その他の遺跡から出土している外来系土器は胎土や手法の点から模倣品と考えられる二次搬入品の占める割合が多い。

次に地域別にみていくと、近畿系土器は島貫Ⅲ期古相以降に土器組成に取り込まれていく点で東方地域からの外来系土器とは意味合いが異なる（川崎 2001）。本地域は、小形有段鉢が搬入される東限でもある。

北陸系土器は、片部・貝蔵遺跡でまとまった量の装飾器台や甕が出土している。装飾器台は横ミガキによる仕上

げである点などから形態だけでなく在来の土器から系譜を追えない手法を用いる土器ではあるが、刻目が刻まれている点は北陸地方の土器にはみられない特徴である。この刻目は島貫分類（川崎 2001）の壺 Ab・Bb の口縁部や頸部に普遍的に見られる属性と共通する。また周辺の遺跡においても出土しているが、雲出島貫遺跡出土の高杯を除くとほぼ模倣品であり、片部・貝蔵遺跡で一定量の出土をみると併せて近隣で生産していると考えられる。

大廓式土器は雲出島貫遺跡で壺・甕が搬入されており、出土量としても静岡県外では最多量クラスの出土をみる。西肥留遺跡や筋違遺跡においても出土しているが、筋違遺跡出土例は胎土が異なる点などから大廓式土器ではあるが、南関東地方からの二次搬入品である可能性が高い。太平洋沿岸地域での活発な土器交流を反映している土器といえる。また、雲出島貫遺跡では東京湾岸南部（比田井 2003）からの搬入品や北関東系の S 字甕が出土している。

4 雲出川下流域の集落の特徴

島貫Ⅲ期古相には高茶屋大垣内遺跡に方形区画や大型建物が出現した。ところが弥生時代後期から長期間にわたって継続する集落は、土器の様相の変化に連動せずに連続して展開していた。

まず、筋違遺跡で狭い範囲にもかかわらず旧河道と居住域との間に水田域が展開していた状況や片部遺跡で確認されている大規模な堰を伴う水路の存在や水田域の状況からは、後背低地に向かって広い範囲に食料生産空間である水田が展開していると推定される。したがって、これらの遺跡の生活基盤は水田稲作農耕にあると考えられる。

次に、平野部に位置し長期的に継続する集落遺跡が多いなかで、一際目立つ存在が高茶屋大垣内遺跡である。計画的な遺構配置はもとより、伊勢湾を臨む台地縁に立地する点では広い範囲を一望することができる。出土遺物の側面においても示唆的であり、外来系土器の出土量は少ないものの隣接地域ではない生駒西麓産の庄内形甕が出土しており、他の遺跡と質量ともに異なる点で一線を画する。また、雲出島貫遺跡では複数地域からの搬入品が多く出土しているのに対し、その他の遺跡では二次搬入品が多い。そして、西肥留遺跡では金属加工の痕跡が認められた。このように遺跡ごとに外来系土器や遺物の出土傾向が全く異なる点は、それぞれの遺跡や出土地点の性格を反映していると考えられ、遺跡ごとに様相の異なる点が特徴的である。

そして今回、西肥留遺跡・赤部遺跡・片部・貝蔵遺跡が同じ旧河道沿いに遡った地点に立地し、筋違遺跡も一連の旧河道から分岐した旧河道際に立地することが判明し、雲出川右岸地域内での集落間の導線がより明らかとなった。これらの遺跡の出土遺物の特徴は全く異なることから、均質な遺跡が横並びに存在しているわけでないことが分かる。すなわち、首長層の介在が窺われる高茶屋大垣内遺跡、物流拠点としての雲出島貫遺跡、そして、金属加工の痕跡が認められる西肥留遺跡、北陸系土器の模倣品が多数出土する片部・貝蔵遺跡をはじめとする旧河道を導線とする右岸の遺跡群は、地域として一連の構造をなしている可能性が考えられるのではないかな。

5 おわりに

本稿では、近年の発掘調査の成果をもとに、居住域を中心とした集落遺跡の動態を概観するにとどまった。今後、墳墓の展開状況をふまえて再考することにした。

【註】

（１）発掘調査成果と明治期の字切図を参考に昭和 22 年極東米軍撮影の航空写真を判読した結果による。

【引用・参考文献一覧】

- 赤塚次郎 2001 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 - 川崎志乃 2001 「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター
 - 川崎志乃 2002 「伊勢型二重口縁壺の基礎的研究」『Mie history』vol.13 三重歴史文化研究会
 - 川崎志乃 2006 「S 字手焙形土器の行方」『古代学研究』175 号古代学研究会
 - 小池香津江 2004 「弥生後期の和と「山中式」」『山中式の成立と解体』第 11 回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
 - 比田井克仁 2003 「三世紀における畿内の関東系土器―動かぬ関東・動く関東―」『初期古墳と和の考古学』学生社
- ※紙面の都合上、報告書類は割愛させていただきました。